

日本学術会議の活動と発展を願って

井端 泰彦

私は日本学術会議会員（第 19 期七部）、連携会員（第 20 期二部）を務めさせていただきました。七部会員時には、新しい学術の在り方委員会（尾島俊雄委員長）委員として七部から矢崎義雄先生と共に参加いたしました。其の中では、日本学術会議の位置付け、学協会との関連、新しい学術会議において、若い研究者、女性研究者の登用につき密度の高い議論を行いました。また、新しい学術の在り方一真の Science for Society を求めて一と題し報告書を提出いたしました。科学のための学術（認識科学）と社会のための学術（設計科学）即ち、理学で代表される自然現象を根底に置いた認識科学と工学で代表される実学的知識活動を発展させる設計科学について、かなり深く何回にも亘り議論したことをなつかしく思い出します。

科学の領域では一昨年あたりから、医学界において、ノバルティスファーマの降圧剤ディオバンの臨床研究において不正事件が occurred。私の母校もその渦中に入り、元学長として、いろいろの方面に多大の御迷惑、御心配をおかけし、申し訳ありませんでした。昨年は理化学研究所における STAP 細胞に関する不正問題があり、STAP 細胞で始まり STAP 細胞に終わる一年でした。日本学術会議では、各大学や研究所にアンケート調査を行い、平成 18 年 10 月に“科学者の行動規範”を声明書として出され、平成 25 年 1 月に改定しておられます。私も永年神経科学の研究者として研究を行って参りましたが、科学研究の遂行には科学者の倫理観が不可欠であります。私の経験から申しますと、研究の重要性は、先行研究を行い、研究費を獲得することも重要であります。第一義ではないと思います。研究の重要性の大きな要素は研究のよろこびを感受することが最も大切ではないかと想います。

私の研究室には医学生が何人も出入りしておりましたが、研究室のスタッフや大学院生の研究の様子をみたり、議論したり、また、自らが研究を行い、論文を発表した学生も居りました。そのような中で、卒業後、私の教室（研究室）に入局し、現在、他教室や他大学の教授を務めている人達も居ります。そのように研究の雰囲気を経験する中で、未知のものを発見することが大きな喜びを生み出すと共に倫理観を生み出すと考えます。現在、多くの大学において、研究に関する倫理委員会が設立され、いろいろ議論が行われておりますが、私は学生時代、大学院生時代からの研究に関する体験学習が最も重要だと考えております。

現在、『学術の動向』について、毎号興味深く読ませていただいております。四年前に起こりました、東日本大震災と福島原発事故につきましても、学術会議では、復興支援の状況分析、原発につきましても専門家による事故原因の探求と今後の対策について議論がなされております。男女共同参画社会において、女性の活動の特徴と支援についての記事や一昨年法人化法の見直しが行われ、多くの学協会が法人となりましたが、法人化についての多くの課題がある状況につきましても拝見いたしました。最近においては、若者論と高齢化社会が益々進行し、認知症に罹患する人が 800 万人を迎える中で、医療、介護、福祉と行政が密に連携し、高齢者の人達の医療、介護など生活支援の方策についての記事も読ませていただきました。

最新号の企画として、赤崎、天野、中村三博士のノーベル物理学賞受賞に際してと題し、多くの専門家の先生方が興味深い記事を書いておられますが、昨秋のノーベル物理学賞において、赤崎勇

博士、天野浩博士、中村修二博士が、“青色 LED の開発と実用化”により受賞されました。発光ダイオード（LED）が発明されてから、青色 LED が開発されるまで 60 年位かかっていますが、明るくて消費電力の小さい白色光源を可能にしたことは、大変大きなインパクトを与える研究成果であり、私も大変うれしく思いますが、国民の皆様に大変大きな勇気を与えるものであると考えます。三博士の今後の御健勝と御活躍を祈念いたします。

日本学術会議は日本の学術の発展のために国際的視野に立ち、現在の状況と将来の展望につき多くの議論を重ね、また発信していただきたいと切に願っております。また、我が国の将来を背負って立つ若い人達の育成についても御尽力いただきたいと存じます。日本学術会議の益々の発展と活動を祈念いたしまして筆を置きたいと思えます。

●プロフィール

井端 泰彦

日本学術会議第 19 期第七部会員

京都府特別参与

京都包括ケア推進機構理事長

京都府立医科大学名誉教授